



Title	3. 社会的事象を多角的に理解することを目指した授業実践
Author(s)	佐藤, 梓; Sato, Azusa
Citation	日本語・国際教育研究紀要, 22, 46-62
Issue Date	2019-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73445
Type	departmental bulletin paper
File Information	JJLIES22_04_sato.pdf,



3. 社会的事象を多角的に理解することを目指した授業実践

佐 藤 梓

1. はじめに

本実践は、北海道大学高等教育推進機構国際教育部の一般日本語コースにおいて、「上級理解（情報検索と分析）」として開講されている科目である。北海道大学日本語スタンダード（以下、北大スタンダードとする）が作成され、カリキュラム改訂が行われた2016年度から開講されている科目である。上級理解科目には、カリキュラム改訂時、本科目の他に映像からの理解（聴解）を中心とした科目と新聞記事の理解やインタビューにおける理解を目指した科目が設置された。それぞれの科目間において、何を理解することを中心にした科目とするかという点で棲み分けが行われた。2018年度からは、クリティカルリーディング（本特集、式部氏論文参照）が新設され、上級理解科目は4科目となった。

本実践は、「情報検索とその内容の分析」を通じて、「社会的事象を多角的に理解することを目指す」ものであるが、科目として設置された当初からこのような目標のもとに実施してきたものではなく、実践を重ねていく中で、「情報検索と分析」をすることで、何を「理解」することを目指すのかという点について、徐々に明確化されてきたものである。

2. 授業目標と目標設定の背景

近年、留学生のスマートフォンの所持率の上昇などにより、生活のさまざまな場面でインターネットによる情報検索が非常に容易なものとなっている。このこと自体は、学習者がさまざまな情報に触れることができるという面において大変有意義であると言える。

しかしながら、膨大な情報へのアクセスが可能になっている一方で、検索して出てきた記事を読めば、何でも簡単に理解したつもりになっているのではないかという懸念があるのも確かである。これは、筆者が本実践とは異なる「表現科目」において、根拠となるデータを示した上で論文形式の文章を書く実践を行っている際に、その情報の信頼性やデータの取捨選択という点で課題として認識していることでもある。

そのため、本実践では、特に社会的な事象は、ある記事を読めばすべて

を理解できるような単純なものではなく、複雑な事柄が関連しているということを学習者が理解することを目指すという観点から授業設計を行っている。

社会的な事象をさまざまな視点から捉えることについては、日本の学校教育の中でも言及されている。中学校学習指導要領（文部科学省2008）では、公民的分野の目標を、「多面的・多角的に考察し、事実を正確にとらえ、公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる」としている。さらに、中学校学習指導要領解説社会編（文部科学省2017）では、現代の社会的事象が多様な側面を持つとともに、それぞれがさまざまな条件や要因によって成り立つことや、事象相互が関連し合って絶えず変化しているため、「多面的」に考察することを求めることや多様な角度やいろいろな立場に立って「多角的」に考えることが必要であるとの指摘がなされている。

本実践でテーマとする「日本社会にある課題や問題点」は、公民的分野の内容であると言える。そのため、社会的な事象を十分に理解するためには、多角的に事象を理解することを目指すことが必要であるといえる。

本実践の学習目標や到達目標は、北大スタンダードの上級理解科目でスキルとアウトカムとして提示されているものに沿った内容である。表1に北大スタンダードの「上級理解」の内容と上級理解（情報検索と分析）のシラバスの内容を記す。

表1にあるように、本実践で行う情報検索やその内容の分析、情報の取舍選択、情報の整理は、上級理解として目標とされる「スキル」「アウトカム」と一致している。「上級理解」の特徴としては、スキルとして提示されている「自分の言葉・文脈で説明することができる」と、アウトカムの「分かりやすく説明する」が挙げられる（表1、波線部分）。「理解」科目ではあるが、理解したことをアウトプットすることがスキルやアウトカムとして明記されている。これは、「中級理解」には明記されておらず、上級理解科目の特徴の1つとしても挙げることができる。

本実践の到達目標には「説明すること」は明記していないが、理解したことを聞き手に分かりやすく説明するということも授業の1つの目標としている。このことは、初回授業において履修者にも伝え、理解したことを他者に伝え、共有するために、「理解」科目であるが、授業に発表などが含まれることを説明している。

表1. 北大スタンダードにおける上級理解のスキルとアウトカム、および、
上級理解（情報検索と分析）のシラバスの内容

北大スタンダードにおける上級理解のスキルとアウトカム	
スキル	1. 専門的学術的な内容を理解し、自分の言葉・文脈で説明することができる。 2. 適切な方法で必要な情報を検索・収集することができる。 3. 情報を適切に整理し、精査することができる。
アウトカム	1. 専門的学術的な講義や解説などを聞いたり、論文や学術書、記事などを読んで詳細に理解し、内容について分かりやすく説明することができる。 2. 目的に応じて必要な情報をさまざまなリソースの中から適切な方法を取捨選択し、検索・収集することができる。 3. 収集したさまざまな情報やデータを集計してまとめ、結論を導いたり、比較したり、批判的に分析して課題やテーマを見つけたりすることができる。
上級理解（情報検索と分析）の授業目標と達成目標	
授業目標	目的に応じて情報を集め、専門的な内容を詳細に理解し、分析することができる。
達成目標	1. 資料や解説などを読んで詳細に理解し、内容について分かりやすくまとめることができる。 2. 目的に応じて、必要な情報をさまざまなリソースの中から適切な方法で取捨選択し、検索・収集することができる。 3. 収集したさまざまな情報やデータを分析したり、集計したりしてまとめ、結論を導き出したり、比較したり、批判的に分析したりすることができる。

3. 実践内容

3.1 授業概要

本実践は、16週32回の授業（実際には初回を除いた31回）を、導入部分とその後を3つに分け、それぞれで扱うテーマを①②③とし、授業の設計を行った。図1に、授業概略と授業回数の配分を示す。

まず、導入部分では、これまでにどのような場面でどのような手段（人

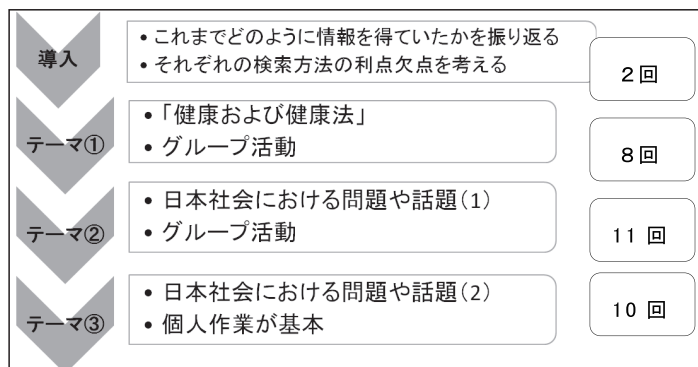


図 1. 授業の概要（授業概略と授業回数の配分）

やツール）を用いて必要な情報を集めてきたかを振り返ることを行う。そして、それらの手段の利点と注意すべき点を洗い出し、その内容を共有することが重要な点である。これまで自分がどのような手段で情報を得てきたかを振り返る最初の段階では個人作業の時間を取るが、その後はすべてグループでの活動である。この導入部分のグループ活動は基本的には3名1グループとし、テーマ①もそのまま同じグループでの活動となる。学習者のこれまでの経験により、情報を得るための手段やツール、使用経験などは個人差が出ることが多いため、それぞれどのようなツールでどのような特徴があるかなどの紹介も積極的にするように促している。

最後に、各グループでまとめたものをほかのグループとも共有する時間を設ける。他のグループと比較することにより、自分たちとは異なる手段や自分たちが気付いていなかった利点や注意点などを共有する場としている。また、この利点や注意点に関しては、クラス全体で共有し、その内容を自分たちのその後の情報検索に活かすために、特にインターネットの記事などで注意すべき点などについては、教師側から学生に説明を求める場合などもある。

以上のように、導入部分には、（1）実践で必要な情報検索ツールに関する知識の共有、（2）グループ活動での意見の出し合いと内容の整理、（3）同じテーマで活動を行ってもメンバーが異なると出てくる意見が異なることを知る、という3つの意義がある。

尚、本実践におけるグループ分けは、すべて教師が行っている。初回のグループ分けは、個人の性格などは把握し切れていないため、出身国・地

域や学習者の属性（コースや学部生・大学院生・研究生など）を考慮し、出来る限り異なる背景を持つ学生を同じグループに配置するようにしている。履修者数は学期により多少の違いはあるが、20人前後である。当初、できあがるグループの数を基準に1グループの人数を調整していたが、グループ活動の最適な人数は3名であると判断したため、現在はグループ数に関係なく、基本的に1グループ3名としている。

テーマ①～③の授業内容の詳細については、次項で述べるが、各テーマの活動にはどのような特徴があるかを簡単に述べる。

テーマ①では学生の生活に関連がある身近な内容でありながら、さまざまな情報が溢れている事柄をテーマとして取り上げ、情報検索とその内容の分析、グループとして内容をまとめる作業、他者との共有を一通り経験する期間となる。

テーマ②では、日本社会で話題、もしくは、問題となっていることをテーマとするため、テーマ①のような生活に関連した個人的なことから、社会的な側面に目を向けるように促し、自分が興味のある事象を選ぶように指示する。テーマ①で行った情報検索とその内容の分析、グループとして内容をまとめる作業、他者との共有という一連の流れは同じであるが、扱う内容が社会的な事象であるため、多角的な見方ができるよう教師が積極的に声掛けをしている。また、多角的に事象を捉えられるようにする1つの方法として、その事象に関わる人や事柄の関連性を図示し可視化することを意識させながら進めている。

テーマ③は、テーマ②で行った情報検索や分析、それらの内容の整理、多角的に事象を捉えることを個人テーマのもとで行う。ただし、完全に一人で進めるのは難しいため、類似したテーマの人とペアまたはグループを作り、進捗状況を報告しながら相互に質問し合い、多角的な見方ができているかを確認するように促している。また、類似したテーマを選択している人とお互いの内容を共有することは、他の人のテーマとの棲み分けを意識させ、独自の観点から1つの事象を分析できているかを確認する場でもある。このようにテーマ③は、個人テーマでありながら、互いの内容を理解し合い、意見交換を通じて、社会的な事象を深く多角的に理解することを目指した実践となっている。

3.2 各テーマの実践内容

3.2.1 テーマ①

先に述べたように、テーマ①では、実際の生活に関連した身近なテーマとして「健康、または、健康法」をキーワードに、まずは自分の興味があることを調べるよう指示する。テーマ①の実践内容は、表2にまとめて示す。

表2 テーマ①の実践内容

目標：身近なテーマを用いて、【調べる→まとめる→共有する→関連性を考える→グループのテーマをみつける→自分のことばで説明する】ことを経験する。
【個人作業：課題】「健康または健康法」について興味のあることを調べる。 【個人作業】調べてきたことをまとめる。 【グループでの作業・情報共有】グループメンバーに実際の資料にどのように書いてあるかを見せながら説明する。聞き手は理解できないことがないように積極的に質問する。他のメンバーの内容を自分で説明できるようになるくらい、十分に理解するように促す。 【グループでの作業・情報共有】メンバーそれぞれが調べてきたことを一枚の紙に付箋に書いて並べ、それぞれの内容で関連のある部分や関連している可能性のある部分を探していく。次に何を調べたらいいかをメンバーと相談しながら考える。その際に、自分の調べている内容をより詳細に理解するための情報集めと、グループメンバーの調べている内容との関連性を意識した情報集めを意識させる。（複数回、この作業を繰り返し、自分が調べていることをより詳細に理解しつつ、他者の事柄との関連性を考える）
【グループでの作業・情報共有】関連性を意識しながら情報検索をし、ある程度内容も詳細に説明できるようになった時点で、メンバー全員の内容を関連づけられるようなテーマを探し、グループとして一つの発表にまとめる。ポスター作成の作業の際に、グループ内でお互いが調べた内容を十分理解するよう指示し、説明やポイントになることなどを確認させる。 【他グループとの情報共有】テーマ①では、ポスター発表にて情報共有を行う（実際のポスター例を図2に示す）。このポスター発表では、自分が調べただけを発表するのではなく、グループの発表として一つのテーマのもとに1人ですべての説明をするポスター発表の形式をとる。そのため、ポスター

発表を聞いて回るグループを別に作り、そのメンバーでポスターをまわり、自分のグループのポスターに来たら、一人ですべてを説明する。ポスター発表の聞き手としては、後で使うことを伝えた上で、ワークシートにその発表の要点や気になった点、疑問点などをメモしておくように指示する。

【発表後のグループでの活動】

①自分のメモを見ながら、各グループの内容について疑問点などを洗い出し、付箋に記入。質問を受けたグループはその内容に答える。

②自分たちのグループの内容について、内容が十分であったかや説明不足がなかったなどを話し合う。

【発表後の個人作業】 自分の生活を振り返り、今後改善したいことなどをその理由とともにまとめる。

テーマ①のポイントは、情報を集め、その内容を分析するためには、どのようなプロセスが必要かを理解することである。すなわち、【調べる→まとめる→共有する→関連性を考える→グループのテーマをみつける→自分のことばで説明する】活動を通じて、自分の選んだテーマについて、詳細に理解し、調べた内容を説明することでさらに理解が深まり、また、次に調べることを見つけ出すということを繰り返すことが重要であるということを理解することである。

ここでの教師の役割は、進捗状況を確認しながら、調べた内容を自分の言葉で説明させ、その内容についての疑問点や理解していないと見受けられる点について質問し、次に調べるポイントに気付かせることである。また、グループでそれぞれのテーマに関連性が見出せていない場合には、関連のありそうな部分についてヒントを出したり、グループとしてのテーマが決められない場合にはいくつかの可能性を示したりして、自分たちがどのようにまとめたいかを考えられるようにすることである。

図2に、実際に学生が作成し発表に使用したポスターの例を示す。例1のグループは、食生活、飲酒問題、運動という3つの異なるテーマであったが、関連性を探る過程で、「今より健康になるためにはどうしたらいいのか」というテーマにまとめた。さらに例1では、属性の異なる人を例示し、生活上にどのような特徴があるかを示した上で、それぞれに合った生活改善を提案をした。例2のグループは、異なるテーマ（コレステロール、怒りと健康状態との関連、肥満）から情報検索をはじめ、当初関連を



図2. ポスター発表例

見つけ出すのに苦労をしたが、調べていくうちに「過食」が共通項として得られテーマとしてまとめられた。

3.2.2 テーマ②

テーマ②では、日本社会で直近半年以内に各種メディアで取り上げられている問題や話題となっていることの中から自分が興味を持って調べられる内容を探すように指示する。

全般的な実践内容は、テーマ①と同様である。手順としては、【1. 個人作業：情報検索（課題）】→【2. 個人作業：内容のまとめ】【3. グループ作業：情報共有】→【4. グループ作業：まとめ作業】（1～4を複数回繰り返す）→【5. 他グループとの情報共有：発表】→【6. 発表後のグループでの活動および個人作業】である。

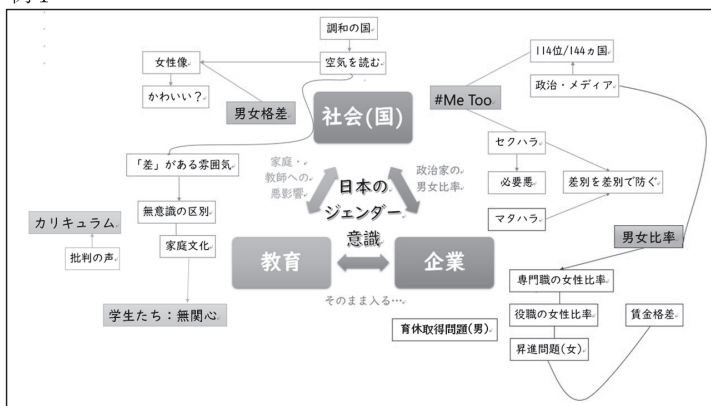
テーマ②の実践で、「多角的に事象をみる」ために意識させる点は下記の通りである。

- 1) 同じテーマに対し異なる意見を持つ人が存在すること
- 2) 立場が異なると一つの事象が異なる見え方をすること
- 3) 【現在、何が起きているのか】【その背景にどのようなことが関連

しているのか】【なぜ現在そのような事象が起こっているのか（過去との関連）】【他の事象との関連性】を分けて考え、それぞれの関連性を考えること

また、自分たちがテーマとしている事象にはどのようなことが関連しているのかを可視化するために、付箋などを用い、その関係性を示す関連図を作成させる。この関連図は、発表の際に、どのようなことが関連した事

例 1



例 2

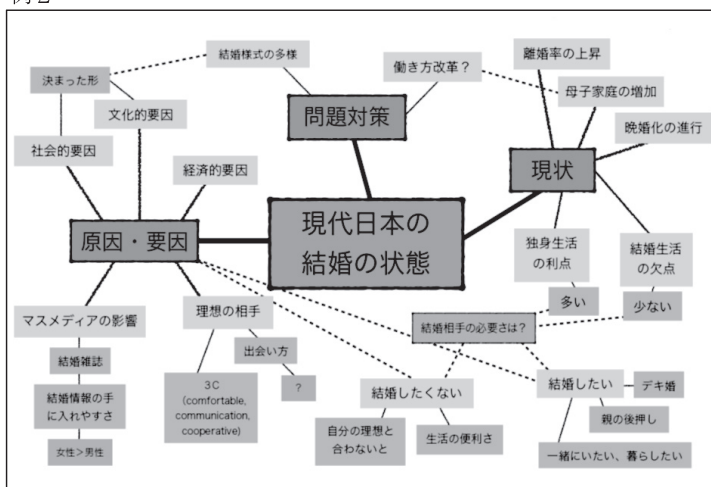


図 3 関連図の例

象であるか全体像を説明する際にも用いる。関連図の例を図3に示す。

図3は、情報検索と分析を繰り返しながら付箋などを使って作り上げた関連図を、発表時に自分たちが扱う内容の全体像を示すために改めて作成し提示したものである。図3の例1・2は、元々は異なるテーマから情報検索を始めていたり、完成した関連図の中では中心的な内容として位置づけられていないものから調べ始めていたりしたが、グループメンバーと情報共有をしていくうちに、それぞれの内容に関連性を見出し、1つのテーマとしてまとめ上げている。

社会的な事象について多角的な理解を促すためには、さまざまな立場の人やさまざまな事柄が関連し合っていることや、今起きていることは過去からのつながりを分析する必要があるということを意識させる必要があるということは、実践を重ねる中で見出されたことである。そのため、上述した「多角的に事象をみるために意識する点」を示し、実践を行っている。

ここでの教師の役割は、各グループでの情報検索やその内容の分析を見守りつつ、必要に応じて質問を投げかけることである。分析が進むにつれ、関連図に書き込まれた事柄について説明を求めた上で、さらにその内容について質問することは、新たな視点からの見方やさらに調べる必要のある内容を気付かせるヒントとなる。このように、教師は特定の情報や知識を提供する存在ではなく、話し合いや情報検索および分析がより深く行えるようにアドバイザーのような立場で関わることである。

テーマ②の情報共有は、スライドを用いてプレゼンテーションを行い、その内容を詳細に説明する形式を採用している。先に述べたように、作成した関連図をはじめに示し、自分たちのテーマにどのような事柄や人が関連しているのかを伝えた上で、それぞれの内容をグループメンバーで分担をして発表をするものである。

そして、発表の最後には、自分たちの発表内容を理解した上で考えてほしいことをまとめ、ディスカッションテーマとして提示する。そのディスカッションテーマはグループごとに話し合い、意見をまとめ、提出する。テーマ②の発表は各グループ25分～30分程度の発表になるため、その内容を聞きながらメモを取ることも聞き手にはタスクとして与えられる。

発表後の活動としては、自分たちの発表に対する疑問点への回答や各グループから得られたディスカッション内容のまとめなどを行い、グループ

活動そのものへの評価や自分たちが提示した情報は信頼性の高いデータだったと言えるか、内容は十分であったかなどの振り返りをを行っている。

3.2.3 テーマ③

テーマ③では、テーマ②と同様に日本社会の問題や課題をテーマとし、個人で情報検索や分析、関連図の作成、まとめ、発表までを行う。ただし、一人ですべてを行うのは、多角的に事象を見るのが難しいため、類似したテーマの人とペア、または、グループになり、お互いの進捗状況を伝えつつ、意見や質問をし合い、多角的な見方ができるようにしている。

テーマ③では、テーマ②同様、異なる意見を持つ人や立場の異なる人からの事象の見え方を意識するよう促し、進捗状況の共有相手からの意見を大切にすることを強調する。そして、進捗状況に対してコメントをする際には、できるだけ相手が気付いていないことをアドバイスするようにすることや、個人テーマではあるが共有相手とはお互いに協力者であることを意識するように促している。

図4は、個人テーマの関連図の1例である。この例では、調べて分かった具体的なことを書き足しながら、その事象に関連している内容を理解し、さらに深めながら「日本におけるホームレス」を多角的に深く理解することを目指している。

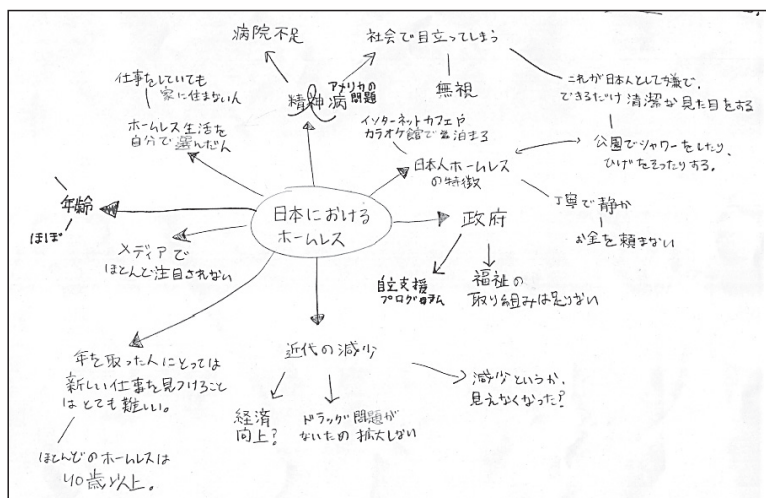


図4 個人テーマの関連図の例

テーマ③の発表では、関連図と調べた内容をA3用紙2枚程度にまとめたものを用いて、共有する場を設定している。類似したテーマを同じ時間帯に発表する形式を取り、聞き手は類似しているテーマの中から、より自分が興味のあるものを1つ選び、聞く形式である。

写真1にテーマ③の発表の様子を示す。発表者を囲んで話を聞くという場のため、ポスター発表よりもリラックスした状態で説明ができ、聞き手もより自由に質問ができるようにしている。このような形式をとることにより、聞き手の内容理解を深めることも目指している。



写真1 テーマ③の発表の様子

テーマ①②③の発表形式は、これまでいくつかの方法を試してきた。本実践の科目は、「理解モード」の科目であるため、発表した内容が聞き手に理解してもらえること、聞き手も十分に理解できるような場であることが重要である。そのため、聞き手に分かりやすく説明するということをどのように意識づけるか、聞き手も内容を深く理解できる、または、発表を聞きながらその事象について考えることができるような形式とはどのような形式かを本実践を行いながら常に検討してきた。現在のところ、ポスター発表（テーマ①）、スライドを用いた口頭発表（テーマ②）、座談会形式の発表（テーマ③）というのが、最も目的にあった発表方法であると言えるが、これについては今後さらに検討していきたい。

3.3 評価方法とその対象

本実践における評価については、これまでも何度も見直し、どのような評価が妥当であるかはまだ試行錯誤の段階である。しかしながら、これまでの実践から、評価対象とするものとししないものを分け、成績評価として示す基準を作成してきた。

評価対象とするのは、下記の通りである。

- 1) 各テーマにおける個別の資料のまとめ
- 2) 各発表の内容 【内容の充実度、関連性の提示】
- 3) 個人テーマについては、個別課題として、自分の調べた内容の中で重要な資料であると言える文献をまとめる。その際、なぜその文献が重要だと思うのかの理由も含めて記述することを求める。
- 4) グループメンバーからの評価（特に貢献度が低いことや調べた内容が不足しているなどの指摘があったものを参加度の検討材料とする）
- 5) 各発表後のまとめ作業の内容

以上の点について、細かく点数化することで成績評価としている。発表時の音声は基本的にすべて録音しているが、あくまでも評価の対象は発表内容であり、発表時の日本語の間違いは評価対象としない。ただし、意味がまったく異なる内容になってしまうような文法的な大きな誤りや著しく発音が悪く、聞き手が理解できていないと判断される場合には、成績評価の対象とする。しかし、このようなケースはごく稀である。また、他の学生からの貢献度の低さを指摘されるようなこともほとんど報告されたことはなく、基本的には減点対象となることはない。

4. 教師の役割と実践の工夫

ここで本実践における教師の役割について改めて明記しておきたい。

まず、文献のまとめ作業の際には、理解し切れない部分などについての質問を受けつけ、ヒントを与えたり文章の構造が理解できていないときにはその説明をしたりする。また、学生からの質問がない場合でも、個人作業としてまとめをしている際には、ある程度まとめが進んだところで、個別に内容理解を確認するための声掛けをし、その日に何が新たに分かったのかを自分の言葉にして説明するよう求めている。

また、グループ活動においては、活動が滞らないように適宜コメントを

したり、先にも述べた通り、関連性が見つけられない場合には、捉え方を変えてみるなど見え方が広がるようなコメントをしたりしている。

以上のように、本実践は、教師が学生に直接何かを教えることは極端に少ない実践形態である。実践の枠組みを作り、あとは学生に任せつつ、必要な場面では声掛けをするというのが教師の役割である。

ただし、本実践が円滑に進むためにはいくつかの工夫も必要である。まず、グループ分けは教師が行い、できるだけさまざまな意見が出るようなグループ作りをする。テーマ①では学習者の性格的な面までは配慮できないため、属性でのみグループ分けを行う。テーマ②の際には、テーマ①の活動中に観察できた個人差（性格的な特徴）なども配慮し、グループ分けを行っている。特に、グループ活動が苦手な人やグループ活動になると人に頼ってしまう人などは、1つのグループにまとめている。教師が声掛けをする回数を増やすなどして、グループ活動のし方を学ぶ機会になるようにしたり、グループメンバーに頼らず積極的に活動できるようにサポートしている。

また、情報検索をして見つけた資料は必ず印刷して使用することをこの授業のルールとして学期始めに伝えている。印刷については、決められた時間までに送付すれば、教師が印刷することにもしている。この印刷物を使用することについては、自分が調べてきた情報を示しながら、どのように書かれているのかを明示して、グループメンバーと情報共有するためである。また、学生はスマートフォンの小さな画面で検索をし、場合によってはそれを見せて終わりにしてしまうことがある。そのため、まとめ作業などを行う際に見直すことが難しい場面などが当初見受けられた。加えて、理解したつもりや読んだつもりになることを防ぐため、また、自分に都合のいい部分だけを情報源としないためにも、本実践では資料は印刷物を使うことをルールとしている。これについては、同じ内容であっても表示される物が印刷物かコンピュータなどのディスプレイであるかによってその理解度が異なるという研究もあり（清原他2003）、本実践のように、できるだけ内容を深く理解することを目指す場合には、印刷物を用いることが有用であると判断した。

さらに、本実践は、効率的にできるだけ少ない労力で学習したいと考える学生には向かない科目であるため、授業開始時に授業の特徴や求められる取り組みなどを説明している。情報検索やその分析の過程においては、

説明に必要な情報を取捨選択するために、まずはできるだけ広く情報を集め、その後必要な情報とそうでないものを分別する必要がある。そのため、調べたことが後になって必要なかった、もしくは、関連がなかったということが分かることもあり得るということを、この科目の特徴として説明している。そのため、実際には、問題はほとんど起こらず、学生もグループでの活動や情報検索や分析などに積極的に参加しているというのが現状である。

5. 学生からのコメント

本実践に対する学生からの評価について触れておきたい。学生から報告された内容は、1) 情報検索やその内容のまとめやテーマを絞り込むことへの難しさ、2) 授業を通し学んだことへの言及、3) 協働作業への言及、であった。

学生からのコメントは以下の通りである。

難しさへの言及

- 3つのテーマを1つにまとめるのが難しかった。
- 集めた情報の関連性を探すのが難しかった。簡単にできることではないと思う。
- ばらばらに見える情報から関連性を見つけてまとめたのはすごく大変だった。
- さまざまなネットの情報から価値のあるものを選びだすのが難しかった。
- 聞き手が理解できるようにどのように説明すればいいか、難しかった。やはり自分が十分に理解していないと説明できない。

授業を通し学んだことへの言及

- 集めた情報の整理と内容のまとめ方が練習できた。
- 関連図を作ったときに、自分の考えがしっかりしていないと、全体の範囲、流れなどが分からなくなることが分かった。
- 大量な情報から役立つ情報を引き出すことやさまざまな情報を組み合わせで比較することが勉強になった。
- テーマに関する背景や原因などを調べて、日本と日本人の社会・心理・考え方などがもっと分かるようになった。
- 1つのテーマを深く勉強して、自分の中にあったステレオタイプな考え方

が解消された。

- グループ内で異なる立場から意見を聞けて勉強になった。

協働作業への言及

- 学生同士のコミュニケーションを取るのが難しかった。
- グループ内の意見の一致をはかる能力をもっと伸ばす必要があると感じた。
- 自分はやはりグループ活動より個人活動のほうが楽だということが分かった。
- グループワークのスキルが深く勉強できた。役割分けをしたからだ。
- 資料の共有はとても重要だと思う。

本実践においては、多角的に事象を捉えられるようになるために関連図を作成しその関連性を理解することを目指しているが、このことに関連して、作業の難しさが指摘されている一方で、授業を通して学んだことの中でも言及されている。難しさが負担になり過ぎないようにする工夫や難しさを感じている時にどのような声掛けができるかなど、教師側の役割を改めて考える必要があると言える。

また、グループでの活動から学んだことがあるという記述もあるが、グループ活動が苦手な場合も報告されているため、教師側でどこまで配慮をするべきかは検討の余地がある。

6. 課題

本実践の達成目標は、1) 資料や解説などを読んで詳細に理解し、内容について分かりやすくまとめることができる、2) 目的に応じて、必要な情報をさまざまなリソースの中から適切な方法で取捨選択し、検索・収集することができる、3) 収集したさまざまな情報やデータを分析したり、集計したりしてまとめ、結論を導き出したり、比較したり、批判的に分析したりすることができる、である。本実践では、この内容が達成できたかを考えると、ある程度はどの学生も達成できていると言えるが、それがどの程度達成できればよいのかという点については不明瞭であり、評価に関しては今後も検討していかなければならない。

また、本実践は学習者が主体となり活動を行うことで進んでいく設計となっているが、その際に、サポート役である教師の役割について、さらに

検討していく必要がある。学生が難しさを感じていることに対して、どのようなタイミングで、どのような声掛けや例示をする必要があるのかなどを今後の検討としたい。

参考文献：

清原一暁・中山実・木村博茂・清水英夫・清水康敬（2003）「文章の表示メディアと表示形式が文章理解に与える影響」『日本教育工学会論文誌』，27（2），117-126

文部科学省（2008）「中学校学習指導要領」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/（最終アクセス：2018年12月16日）

文部科学省（2017）「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/_icsFiles/afieldfile/2010/12/16/121504.pdf（最終アクセス：2018年12月16日）

さとう あずさ（高等教育推進機構国際教育研究部非常勤講師）